

どうやってみをまもるのかな（東京書籍1年）

東広島市立高屋東小学校 木本豊子

1 新教材に関する論文

(1) 教材について

生命をもつ動植物はすべて尊く、何らかの意味をもってこの世に生まれ、命は次へと引き継がれていく。自らの使命を果たすためには、それぞれが生きている環境に適応し、あらゆる敵から身を守るすべを持たなくてはならない。生きていくためには、知恵が必要なのである。

この教材は、絵本『「どうやってみをまもるのかな」(やぶうち まさゆき) 福音館書店』をもとに、教科書教材として書き換えられたものである。絵本は説明が短く、挿絵がほとんどを占めており、8種類の動物について、身の守り方が書かれている。本教材では、そのうちの『ヤマアラシ』『アルマジロ』『スカンク』が取り上げられている。それらは、自分の身を守るためのからだの作りや攻撃方法などの特徴が、他の動物に比べて際立っている。いずれも児童にとって身近な動物とは言えないが、これまでに本や動物園で見たことがある児童も多いと思われる。そこで、教材と出会った段階で、「しつとる。しつとる。」と声があがり、意欲的に学習が始まるだろう。挿絵の力も加わり、内容を捉えるにはそれほど難しくないかもしれない。しかし、内容を理解したことで学習のすべてが分かった気になってしまうことも予想される。

では、本教材の特徴を細かくみていくことにしよう。はじめに、教材の題に注目してみると、「どうやってみをまもるのかな」という題から、この文章は、動物が自分の身を敵から守るために行っている方法について書かれていることがわかる。また、疑問や問いかけの意味を含んだ「かな」で終わっていることから、読者に予想させ、その答えを知りたいという気持ちを抱かせることで、教材に引き込んでいく。しかし、1年生のなかには、「みをまもる」の「み」が自分の体であるということが分からない児童がいると思われる。そこで、身を守るとはどういうことなのか話し合ったり、本文を読む中で題に立ち返ったりすることが必要である。

次に、文章構成についてみてみると、話題提示、事例1(ヤマアラシ)、事例2(アルマジロ)、事例3(スカンク)の順序で述べられている。それぞれの事例において、取り上げられた動物の名前、身を守るための体の特徴、問いかけ、身の守り方、具体的な方法の順序で説明されている。事例1と事例2については、具体的な方法が一つであるのに対して、事例3のスカンクは、おどしてもだめなら攻撃するというように方法が二つ書いてある。その違いは、見た目でも分かる体のつくりの特徴がある動物(ヤマアラシ・アルマジロ)と攻撃の仕方に特徴がある動物(スカンク)の違いによるものである。

論理展開は、どの事例についても「問い」と「答え」、「つくり」(構造・仕組み)と「働き」(機能)の関係になっており、同じ論理展開が繰り返されている。また、「つくり」と「働き」の関係においては、接続語は使われていないにしても、どの事例も前の段落と関係づけて書かれている。しかし、児童には、どのように関係づけられているのか理解することは難しいと考えられるため、「はりが背中に付いている」→「後ろ向きになる」という関係性を具体的に動作化などで気づかせることが必要である。

さらに、最後のページには、『ハリネズミ』『ウサギ』『エリマキトカゲ』の挿絵が載せられている。どの動物についても、平常時と身を守っているときの様子が描かれており、文章の流れからすると、それらの動物たちも自分の身を守るために固有の特徴があるということが表現されている。

以上のような教材の特徴から、この教材では、動物たちがどのようにして自分の身を守っているのか、それら固有の特徴をどのような論理展開で説明しているのかを読み取る。そして、その論理展開を活用して他の動物についても、その身の守り方を説明させることによって、児童の思考力と表現力を育てることを目標に立てた学習をすることができるだろう。

(2) 学習目標について

① 価値目標

本教材「どうやってみをまもるのかな」は、動物が自分の身を守るために固有な特徴を持っていることが述べられた説明的な文章である。

学習指導要領第2章第1節国語の第3「指導計画の作成と内容の取り扱い」(7)において、道徳の内容について、道徳の時間などとの関連を考慮しながら、国語科の特質に応じて適切な指導をすることとある。第1学年及び第2学年の道徳の内容に、次の二つがある。

3□ (1) 生きることを喜び生命を大切にすることをもち。

3□ (2) 身近な自然に親しみ動植物に優しい心で接する。

生きていることは素晴らしく、それ自体に意味があり、価値がある。その命を守る方法は、長い進化の過程で生まれた生命の神秘である。そこで、本教材は、道徳の内容3□ (1)と関わりが強いと考える。よって、価値目標を『生きることを喜び、生命を大切にすることを育てる』と設定する。

② 技能目標

学習指導要領「読むこと」の指導事項で第1学年及び第2学年について次のように記されている。

ア 語のまとまりや言葉の響きなどに気を付けて音読すること

イ 時間的な順序や事柄の順序などを考えながら内容の大体を読むこと

ウ 場面の様子について、登場人物の行動を中心に想像を広げながら読むこと

エ 文章の中の大事な言葉や文を書き抜くこと

オ 文章の内容と自分の経験とを結び付けて、自分の思いや考えをまとめ、発表し合うこと。

カ 楽しんだり知識を体得したりするために、本や文章を進んで読むこと

これらのうち、本教材は説明的な文章であるから、イの「時間的な順序や事柄の順序などを考えながら内容の大体を読むこと」が中心的な目標となる。その中でも、この教材は、「問い」と「答え」を使って論が展開しているところに特徴があるため、『事柄の順序などを考えながら内容の大体を読む』を技能目標と定める。しかしながら、指導過程において、ア、エ、オ、カに関わる活動が連続的に行われることから、次の目標に向かうための基盤を少しずつ築くことになる。

また、本提案では、事柄の順序を捉えるために、言語活動として対話を使う。対話によって読解をするわけである。そこで、「話すこと・聞くこと」の指導事項とも深く関わってくる。第1学年及び2学年の話し合うことに関する指導事項オは、「互いの話を集中して聞き、話題に沿って話し合うこと」である。技能目標を達成するための方法として、「話すこと・聞くこと」を関連づけることで指導の効果を高めたい。

③ 態度目標

入学して間がない1年生ではあるが、毎日の生活の中に読書が位置づいていることが望ましい。読書指導は、すでに就学前から始まっている。また、入学してからも、教師が読み聞かせをするなどして、本に親しんできている。しかし、読書に対する関心には個人差がある。また、好きなジャンルが偏っており、今のところ人気があるのは、仕掛け絵本やなぞなぞ絵本である。

本教材の内容は、動物の生態に関わるものであるから、動植物などについて書かれている本にも興味をもたせたい。そこで、態度目標を『動物に関する本を進んで読むことができる』と設定する。態度目標を達成するためには、関係の本が身近なところにあることが必要である。学級文庫の他に、特設コーナーに置くことで、児童が、常時、自由に手にとって見たり読んだりできるようにしておく。また、教師による読み聞かせやブックトークによって、科学的な読み物や図鑑などのジャンルにも興味に向くようにする。

(3) 言語活動と活動目標

活動目標を「どうぶつとおはなししよう」と設定する。活動目標は単元のゴールであり、単元を貫く目標でもある。児童はそこに向かって主体的に学び続ける。このような活動目標を設定した理由は次の通りである。

- ① 児童の発達段階を考慮する
- ② 教材の特徴を活かす
- ③ 相手意識と目的意識を明確にする

①については、この説明文を学習する時期（6月頃）の児童は、ひらがな50音すべての学習を終え、一応、読み書きができるようになっている。しかし、まだ全員の児童がひらがなを習得するまでには至ってなく、「ド・ウ・ヤ・ツ・テ・ミ・ヲ・マ・モ・ル・ノ・カ・ナ」と一音一音ひらがなの音を発することはできても、まだ意味のまとまりとして読むことができない児童もいると思われる。文章を書くことについては、さらに難しい段階にあると言える。そこで、児童の発達段階に合わせて、話し言葉を使った楽しい言語活動が適していると考えた。

②については、この教材の特徴として、(1)で述べた通り、3つの動物それぞれについて「どのようにして身をまもるのでしょうか。」と問い、その問いに対して身を守る方法について答える形で説明されている。この「問い」と「答え」の関係を二人組になって対話させることで内容や論理展開を読み取るのである。基本形としては、『動物』と『人』の役割で対話をする。尋ねる側の人、動物が自分の身をどのようにして守っているのかを質問する。それに対して答える側の動物は、どのように身を守るのか本文に書かれていることから答えを選び出し、本文の説明の順序にしたがって説明する。動物になりきることで、児童は本文に書かれていることを積極的に読み、それを相手に伝えようとする。役割は交代して、どちらの役も体験できるようにすると、「問い」と「答え」の関係をより確実に理解することができる。

しかし音声言語は、発声と同時に消えてしまうという欠点がある。そこで、対話したことを簡単に記録に残しておくようにする。児童が後で学習を振り返ったり、教師が評価したりするためにも話した内容を文字化しておきたい。それが、「おはなしきろく」である。吹き出しの中に対話したことを書かせるようにする。吹き出しを使うことで、話し言葉をそのまま書き言葉にすることができ、書くことへの児童の抵抗感を軽くすることができる。ここでは、正しく丁寧に書くことより、書くこと自体を楽しむことを目標にしたい。そして、できあがった「おはなしきろく」は、ノートに貼り、学習の足跡として残していく。児童が、これから学習を積み重ねていくなかで、ノートはいつでも既習を振り返ることができる。

③については、言語活動を行うに当たって留意したいこととして、相手意識と目的意識がある。児童が相手意識と目的意識をもって言葉を介して活動をし、それによって何かが生み出される学習にしたい。対話は、組になった複数の人どうしが、双方向で話し合うことであるから、必然的に対話をする人の間に相手意識が生まれる。また、話す相手に伝えたいことを分かりやすく話そうと目的意識も明確になる。そこで行われる対話はリアルなものとなり、言語活動をすることに必然性が生まれる。集団の中でともに学び、高め合うことを学び始めた1年生にとって、適切な言語活動だと考える。

以上のことをまとめると、活動目標「どうぶつとおはなししよう」は、児童に動物の役割をさせることで児童の学習意欲を引き出し、ペアで対話しながら教材の内容と論理展開を読み取る。さらに読み取ったことを活用することによって、論理的な思考力と表現力を育てる学習と言える。

(4) 方法と評価 (指導計画 全8時間)

活動目標＝単元名 (どうぶつとおはなししよう)

	言語活動	学習目標	評価方法
導入 (2時間)	<p>○並行読書を行う。 教室に「動物の本コーナー」を設置することにより、児童が動物に関心をもつような環境を整える。児童は自由に本を選び、動物の本を読むことができるようにする。</p> <p>○動物の挿絵を読む。 教材文にある防衛している動物の挿絵を拡大したものを提示し、それを見て想像力を働かせるようにする。なぜそのようなことをしているのか一人一人が想像したことを話し合うことで教材を読むための構えをつくる。</p>	<p>(態度目標形成)</p> <p>○進んで動物に関する本を読むことができる。</p> <p>○自分の思いや考えを進んで発言することができる。</p> <p>○友達の発言を最後まで聞くことができる。 ・知識を共有する。 ・体験と関連させる</p>	<p>行動観察</p> <p>発言の内容</p>
展開 (4時間)	<p>○対話を通して、本文の内容と論理展開を読み取る。</p> <p>1 題名について考えたり、教師の範読を聞いて感想を話し合ったりする。</p> <p>2 教師(問う人)と児童(答える人)で対話することを通して、やまあらしの防衛について読み取り、対話記録を書く。 【事例1で対話のモデルを示す】 (教) 名前を教えて? (児) やまあらしだよ。 (教) 体はどうなっているの? (児) 背中にとげがあるよ。 (教) 敵がきたらどうするの? (児) とげを立てるんだよ。 (教) どんなふうにするの? (児) 後ろ向きになって、とげを立てるよ。 その後、児童同士がペアで対話する。また、役割を交代して対話し、対話したことを記録する。</p>	<p>(技能目標形成)</p> <p>○説明の順序を理解することができる。</p> <p>①全体の構成 ・話題提示 ・事例1 (ヤマアラシ) ・事例2 (アルマジロ) ・事例3 (スカンク)</p> <p>②事例の説明 ・動物の名前 ・防衛のためのつくり ・問いかけ ・どのようにして身を守るか ・具体的な方法</p>	<p>行動観察</p> <p>対話の内容</p> <p>ノート (対話記録)</p>

	<p>教師は、問いと答えの関係を板書し、構成を視覚化する。</p> <p>3 児童同士が役割を交代しながら対話することを通して、防衛の仕方について読み取り、対話記録を書く。また、事例と事例の共通点と相違点について話し合い、違いに気づかせる。</p> <p>① 「あるまじろ」 事例1で行った対話モデルを使って、読み取る。</p> <p>② 「すかんく」 事例1、事例2の違いとして、見かけに特徴がない動物は、行動に特徴があることを対話から導き出すようにする。</p>	<p>○問いと答えで表現することができる。</p>	
<p>終結 (2時間)</p>	<p>○ 教材の論理展開を活用して対話をさせることで、特定の動物にだけ身を守るための特徴があるのではなく、身を守ることは、生きているすべてのものに共通するものであることに気づかせ、生命を大切にすることを養う。</p> <p>1 いろいろな動物についてどのように身を守るか、挿絵から想像したり、本で調べたりする。</p> <p>2 いろいろな動物がどのように身を守るのか分かったことについて対話し、対話記録に書く。</p> <p>3 自分の身を守りながら生きている動物から思ったことや考えたことについて、感想を話し合う。</p>	<p>(価値目標形成)</p> <p>生きることを喜び、生命を大切に にする心情をもつ。</p>	<p>行動観察</p> <p>対話の内容</p> <p>ノート (対話記録)</p> <p>話し合いの内容</p>

(5) おわりに

本稿では、小学校1年生で初めて学習する説明的な文章の授業について提案をした。一番大切に考えたことは、児童の発達段階である。1年生の児童は、まだ幼い発達段階にいる。しかし、幼いがゆえに好奇心が旺盛であるとも言える。その好奇心を利用して、児童の興味関心を引き出す授業を展開したい。児童が主体的に活動し、活動を通して思考が深まっていくような楽しい授業である。鳥の雛は、初めて見た動くものを親だと認識する。1年生が初めて学習する説明的な文章の授業が、よい刷り込みになるように、児童にとって楽しい学びにしなければならない。

ここで提案した授業は、「動物」と「人(自分)」との対話を設定して、読解することに特徴がある。誰と誰で対話させるのか、設定の仕方でも学習の中身が変わってくる。他にも「動物」と「動物」、ここでは「やまあらし」と「あるまじろ」で対話させると、互いの特徴の違いをクローズアップすることができるだろう。しかし、一つの単元において付けたい力を欲張りすぎると、ねらいがぼやけてしまう。そこで、教師はねらいを絞り、長期・中期・短期目標をもって、計画的な授業設計を行いたい。

